

## 古代日向における国際交流

宮崎県南郷村の百済伝説の考察

長友武

初めに

宮崎県の中北部に位置する人口三千人足らずの小村、南郷村に古代より、百済王族の流浪伝説が言い伝えられている。この村は、日向市から約四十キロ（十里程）西に入った典型的な過疎化現象に苦しむ山村の一つで、日本近代の代表的歌人若山牧水を生んだ東郷村と、平家の落人伝説で知られ、民俗学の父と呼ばれている柳田国男が「後狩詞記」を著した椎葉村の中間に位置している。これも何かの縁とでも言うべき文学的環境にこの村は存在しているわけである。我らの故郷である日向は文字に現れているとおり、日に向かう国、非常に自然に恵まれた風土である。日向市の美々津の港からは、神武天皇が大和に向けて船出をしたと言う伝説もあり、古代に於いて、西都原古墳群に見られるように、強大な国家の芽生えがあり、日本国家の発祥の高天が原伝説その他の古事記に出でくる「阿波岐原」「鵜戸神宮」など神話に由来する歴史上の地名も数多く残されている。ただ、この百済王の流浪伝説は、天智天皇没後、壬申の乱以降の事であるが、奈良を中心にした大和と古代に強力な国家を形成していたと思われる日向との交流を軸にして考えれば、史実的に興味深い出来事である。古代日向と大和との交流は草創期の仁徳天皇の後に日向の諸県君牛諸井の娘である髪長姫が迎えられた事などを「史実」に見るにつれ、その交流の深さがうかがわれるのである。

朝鮮半島の西南端に位置していた小国の百済が唐と新羅の連合軍によって滅ぼされた白村江の戦いや、当時の唐と日本の関係を「日本書紀」や「万葉集」などに求め、この南郷村の百済王の流浪伝説に考察を加えたいと思いついた次第である。

### 1 その当時の歴史について

当時の古代日本を取りまく環境は、西に大国で最高の文化水準を誇っていた唐、そして朝鮮半島には、北に高句麗、東端に新羅、そしてこの百済、その南に任那と半島は四つの国に分かれていた。そして、漢字を初め、仏教や最先端の学問は半島を経由して日本に伝えられてきた。大國唐に何回にもわたって遣唐使という留学生を派遣したり、また任那には、日本府（つまり大陸との交渉を盛んにする大使館的なもの）を創設したりして、当時の近代化政策を積極的にとったわけである。小国任那は新羅によって滅ぼされ、その後日本は、高い文化を持つ国百済との交流を密にして大陸との接点を求めたわけである。この百済は扶餘に都を持ち、白馬江のほとりに農耕を中心にして国家を形成していたのである。

この国の悲劇は六六〇年頃に起こった。当時の唐と新羅が連合して、この小国の百済を攻めた事が日本書紀に書かれている。大和を中心にして古代国家の形成途上にある我が国に対し助けを求めた事も記されている。

○秋八月壬午朔甲午。新羅、以百済王斬己良將、謀直入國先取州柔。於是、百済知賊所計、謂諸將曰、今聞、大日本國之救將盧原君臣、率健兒萬餘、正當越海而至。願諸將軍等、應預圖之。我欲自往待饗白村。○戊戌、賊將至於州柔、統其王城。大唐軍將、率戰船一百七十艘、陣列於白村江。○戊申、日本船師初至者、與大唐船師合戰。日本不利而退。大唐堅陣而守。

白馬江の沖の白村江の戦い（六六三年、天智二年八月）において、この百済は日本の援軍も空しく滅ぶわけである。この戦いに日本は中大兄皇子を総指揮者として仰ぎ、白村江まで赴くのであるが、犠牲者約三万人を出し、百済王の義慈王の子の善光王を初めとする王族、それに官僚、建築家、医者、学者など約三千人を難波まで運んでくるわけである。

この白村江の戦いに赴く少し前の事なども、日本書紀や万葉集などに述べられている。万葉集を代表する女流歌人の額田王に次のような有名な歌がある。

熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は榜ぎ出でな（額田王）



をも与えたのである。日本書紀にみられる帰化人達の名前は次の通りである。

- ・ 鬼室集斯 (学職頭)
- ・ 木素貴子 (兵法職)
- ・ 鬼室集信 (葉事職)
- ・ 沙宅紹明 (法宮大輔)

また、他にも多数の優秀な帰化人達の名前を見ることが出来る。彼らは現在の我々に身近な職名に譬えるならば、鬼室集斯は文部大臣として学問の普及に努力し、滋賀県の蒲生野にお墓が大事に保存され、彼の業績をたたえる鬼室神社もつくられており、現在も参拝者が数多く参っている。木素貴子は防衛庁長官、鬼室集信は厚生大臣、沙宅紹明は法務次官的仕事に就いていたことが想像できる。つまり、これらの帰化人達は自分達を大切に取り扱ってくれた天智天皇への忠誠を忘れなかったし、将来、自分達の国百済の再興の機会に恵まれれば、再び彼らの故郷の地に帰ることを夢見てたのではないかと思われる。現在でも滋賀県の湖東町の百済人の居住後からはオンドルという韓国の暖房装置を作った形跡などがみられ、これらの日本書紀の史実を立証しているかに思われる。百済人は主に官僚、文化人、学者に多くの人材を出し時の近江朝を支えたわけである。

百済人にとっての不幸は、彼らを寵愛し、重く登用してきた天智天皇の死によって始まるわけで、額田王の挽歌に次のような歌がある。

かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを

やすみしし わが大王の かしこきや 御陵仕ふる 山科の 鏡の山に  
夜はも 夜のことごと 昼はも 日のことごと 哭のみを 哭きつつありてや  
もしきの 大宮人は 去別れなむ

と天智天皇の死の悲しみを歌いあげている。万葉集の中で、他の人が歌ったどの挽歌よりも、これらの額田王の挽歌は秀作である。これらの歌からしても、天智天皇の死がいかに大きな衝撃を与えたかは分るのである。

天智十年(六七一年)、天智天皇の没後、この事件も日本の歴史上初めてのことと思われるが、皇位継承をめぐる、天智天皇の遺子大友皇子と天智天皇の弟君大海人皇子との間で争いが起きる。叔父と甥の間で起こった皇位継承の争いは日本国中を巻き込んだ内乱として発展する。この争いが弘文一年(六七二年)の壬申の乱である。この争いは天智天皇によって重用されていた百済系の帰化人達と、百済系の帰化人達が日本に渡来する以前から各地にいた新羅系の帰化人(彼ら、新羅系の人々は天智天皇があまりにも百済系を寵愛したために時の権力から疎遠になっていった)達をも巻き込んで激しい内乱となっていた。皇位継承を主張する大海人皇子は吉野で六月挙兵した。彼は伊賀、伊勢、尾張、不破関と軍を進め、各地の新羅系の豪族をとりまとめ、七月大友皇子の近江軍と大和で合戦、その軍を破ったのである。つまり、天智天皇の弟大海人皇子は伊賀や尾張の新羅系の豪族達、彼らはどちらかといえば、あまりにも天智天皇の百済系の帰化人重用に反発して、この乱に乗じて大海人皇子軍に加入したわけである。この大海人皇子軍の合言葉が、新羅の別称、金(キム)を叫びあっていたことが言われている。

このようにして、壬申の乱は日本の皇室史上例を見ない天皇家内の争いでは天智天皇の弟大海人皇子が天智天皇の遺子大友皇子に勝つことで終わるわけであるが、前にも述べた系図に見られるように、大海人皇子と額田王との間に生まれた十市皇女が、天智天皇の遺子大友皇子に嫁ぎ、二人の間には葛野王という男子にも恵まれていたわけである。つまり、大海人皇子は自分の娘の夫(大友皇子)を攻めたわけである。大友皇子は自害したわけであるが大きな犠牲をとまってこの政変は終了した。天武一年(六七二年)天下を平定した大海人皇子は飛鳥浄御原宮に新しい都を定め、天皇として即位する。

天智天皇のもとで要職を勤めていた百済系の帰化人達は要職から下ろされ野に下ることになる。前に述べた学職頭にあった鬼室集斯を初め多くの人々は村々に安住の地を求め、蟄居する事になる。彼らはこの壬申の乱そのものに武人として加わることなく、文人として内乱を傍観していたわけであるが、百済系の帰化人で武人となった者達はこの天武天皇、そして新羅系の追討を逃れて、地方に逃亡していくことになる。

南郷村の百済王流浪伝説には前に述べたような歴史的流れの中で起こったことである。百済最後の王、義慈王には善光王を初め多くの子女があった。天智天皇の庇

護のもと、彼らは大津京近くで安らかに生活でき、高い地位を保障されたが、壬申の乱により、その地位を新羅系の帰化人にとって替えられることになる。

II 日向の百済王族流浪伝説について

南郷村、それに木城村や高鍋町などの話を総合すると次のようなものである。安芸の宮島を出発した王族を乗せた船が嵐にあって日向灘沖で難破し、二つの箇所流れついた。日向市の金ヶ浜には禎嘉王（父）華智王（二男）を中心に女官、舎人など十数人。一方、高鍋町の蚊口浦には福智王（長男）とその后、それに禎嘉王妃、伎己乃らの一行であった。父、禎嘉王は安住の地のことで占ったところ、金ヶ浜より七十八里（百済里）の山中が良いとの結論が出たので南郷村の神門まで行った。一方、蚊口浦に着いた福智王は玉を投げて安住の地を占ったところ、十八里（百済里）の木城村の比木まで飛び、そこにとまったので、比木を安住の地と定め住みついたと伝えられている。この南郷村の神門と木城村の比木は海沿いの道路を計ってみると約九十キロの距離になる。

父の禎嘉王一行が日向の金ヶ浜から南郷村の神門まで逃げてゆく途中で、現在も地名としてその行列に由来している地名がいくつか残されている。一行の中に懐妊している女性があり、逃げていく途中に赤子を村人の助けなども得て無事に出産したと言われている「うぶの」なる地名もある。伝説はまた次のように発展してゆくのである。

南郷村の神門と木城村の比木に安住の地を見いだした一族にとって、少し経った後に都から追討軍が派遣された。王の居場所、南郷村の神門をめざした追討軍に対して、木城村比木の福智王はこれを伝え聞いて、石河内、中之又、渡川、鬼神野の豪族に援軍を依頼し、父の禎嘉王を救おうとして南郷村の神門まで軍を出し守ろうとしたわけである。東郷町との境にある伊佐賀の地で、追討軍と父を助けにきた援軍と激しい戦闘があった。両軍に多数の戦死者が出たと言われている。また、伊佐賀という集落の土地が赤土なのはこれら戦死者の血がしみついたからだと言われている。この伊佐賀の地で禎嘉王の二男の華智王は戦死し、父の禎嘉王も流れ矢にあたって戦死したと伝えられている。二男の華智王は伊佐賀大明神として、父の禎嘉王は神門神社の神門大明神として、村人達の熱い気持ちでもって祭られるように

なったのである。また王に仕えた女官や従者達も王の死に従って殉死し、王の死体とともに南郷村の入口の所にある禎嘉王の墓（塚の原）に埋葬され、現在もその塚には村人達が参拝している。追討軍は天武天皇の軍ではなかったと思われる。これらの百済王一族の流浪の悲話は、村人達に言い伝えられ現代に至っている。王と王妃、それに長男の福智王、二男の華智王、四人が別々の地に葬られ、別々の神社に祭られている。神社と墓地の場所は次の通りである。

王族名	神社名
禎嘉王	神門神社
王妃	大歳神社
長男 福智王	比木神社
二男 華智王	伊佐賀神社

ちょうど、旧暦の師走の十四日に長男の福智王を祭っている木城村の比木神社の神官を先頭に氏子達が福智王のご神体を持って、南郷村の神門をめざす九泊十日の旅に出発する。高鍋町の蚊口浦を通り、母君のお墓に参拝し、大歳神社を経て、国道十号線に沿って北上し、金ヶ浜で禊をすませ、南郷村神門へと向かうのである。これが師走祭りと言われている行事で四人の王族が離別を余儀なくされたわけであるが、長男の福智王のご神体が三人の祭られている箇所・神社を訪ね歩き、また神門から比木まで帰途に着くこの師走祭りの行事の中に百済の儀式や韓国の習慣につながる数多くのことを見出すことができる。また、ご神体が旅する村々に於いてはこの福智王を迎える村々の人々はこの来訪を神の来訪として迎え、豊作や家族の幸福、それに安産がかなうように祈るわけである。また、村々で神楽を舞って歓迎する。

この師走祭りで百済や現在の朝鮮半島との類似性を見い出せると思われる箇所を述べてみると次のようなことである。

- (一) 河原に降りて石を二つ取り上げ、それを禎嘉王の墓の回りに積み上げる儀式
- (二) 父の禎嘉王の葬られている墓の回りを行列が二回程回り「ウォー」「ウォー」

と悲しげに叫ぶ儀式

(三) 祭りが無事に終わり、木城村の比木に帰る福地王のご身体に向かって村人達が「オー、サラバジャ」と言って手を振って別れを惜しむ儀式

以上の三つの箇所に、ほかの日本各地に残されている祭りとは異なり百済と朝鮮半島の行事との類似性が指摘できると思われる。(一)については、日本には古米道祖神と言って、長い旅に出る時旅の安全を祈ってお祈りする習慣がある。別名を塞の神とも言い、旅人も送る側の家族もお祈りする。この旅の途中で河原に降りて行列に参加する人はそれぞれ石を二個程懐にいれ、それを禰嘉土の墓まで持参し、そのお墓の回りに石を積むわけである。このことと同じような習慣が朝鮮半島に見られる。韓国では、「ソナンダン」と言って、石をうず高く積み上げ旅の安全を祈願するわけで、禰嘉土の墓の回りに石を積む習慣はまさに木城村から南郷村への行き旅、また南郷村から木城村への帰りの旅を祈願しての道祖神的色彩の強い半島の「ソナンダン」そのものではないかと思われる。

次に(二)の「ウォー」「ウォー」と父の禰嘉土の墓の回りで、長男福智王のご身体を持った比木神社からの旅人は悲しげに叫ぶわけであるが、この「ウォー」「ウォー」と叫ぶのは父、禰嘉土の靈魂を鎮める意味で叫ぶわけであるが、現在でも朝鮮半島の葬式に於いては「アイゴウ」「アイゴウ」と言って「哀号」と記すのであろうが、死者の靈を鎮める意味で泣き叫ぶ習慣がある。この「アイゴウ」と「ウォー」「ウォー」と叫ぶのはこの「アイゴウ」を「哭くの儀式」と言って悲しみを最高に表現する儀式がある。この「哭くの儀式」が墓の回りでの「ウォー」「ウォー」と叫ぶ、それが原型ではないかと推測される。つまり古代百済の葬儀の儀式そのものが残されているのではないかと思われる。この点についてはさらに朝鮮半島を調査してみたいと思っている所である。

さらに(三)についてであるが、「オー、サラバジャ」は近世の歌舞伎や浄瑠璃などの台詞としてよく使用されている。よく時代劇などでも「しはしの別れ、おさらばじゃ」と使用されている。この言葉が生まれたのは江戸時代以降の口語に於いて発達してきたわけである。この師走祭りの歴史を記した書物はないけれども、はるか平安、いやそれ以前から行われている行事であろう。その師走祭りに近世の

「おさらばじゃ」が使われるのには疑問が残る。むしろ、大胆な発想かもしれないが、現在の韓国の言葉「サラン」(日本語に訳すると愛)「サラバジャ」(愛する者が別れてゆく時に再び元気で会いましょう)との意味である。「オー」を感動を表す接頭語の助詞で、これは万国共通である。このような視点から、最後のお別れの言葉「オーサラバジャ」を分析してみるのも一つの見方ではないかと思う。

さらに、この南郷村の姓名の中に「中村」、これは日本の姓名の中で占める割合が一番多いものであるが、この南郷村の「中村」は「中邑」と書く姓名ばかりである。「村邑」「都邑」などこの「邑」という文字は、漢詩などによく登場してくる。百済の帰化人達が残した姓名の可能性もあり、今後も調査をしてみたいと思っている所である。

また、「オーサラバジャ」と言って、福智王のご神体が比木神社に向けて出発するとき、村の人々はもちろん普段着でシャモジやザルや鍋を持って送るわけであるが、そのときお互いの顔に墨(つまりスス)を塗りあう行事がある。この顔に墨を塗る行事は朝鮮半島にも数多くみられ、別れの悲しみを墨を塗ることによって隠すためだと言い伝えられている。

百済の王族が流れ着いたとされる伝説を裏づける遺品として、現在神門神社の中に銅鏡三三面、馬鈴、馬鐸、須恵器、鉄剣、銅製の像などが保存されている。これらの銅像を村長、教育長の御厚意により拝見する機会を得たわけであるが、何百年もの間宝物として保管されていて、実に美しい光沢を放ったものばかりであった。銅鏡は次のような種類のものである。

- ・半円方形帯神獸鏡(三角縁神獸鏡)
  - ・半円方形帯神獸鏡(人物禽鏡)
  - ・六乳花文鏡
  - ・鋸齒文獸帶鏡
  - ・海獸葡萄鏡(五種類)
  - ・唐花六花鏡(端花六花鏡)
- (日本で五面しか発見されていない。東大寺にある品を型にして作ったものと思像される。)
- ・伯牙彈琴鏡

- ・端雲双鸞八花鏡 (三種類)
- ・花禽八花鏡
- ・花禽双鸞八稜鏡
- ・花枝双鸞八花鏡
- ・狻猊双鸞八花鏡
- ・双麟双鳳八花鏡
- ・双麟双鳳鏡
- ・端花双鳳八稜鏡
- ・劍菌離蝶鳥鏡

(神門物語より)

以上が銅鏡の種類である。私自身考古学の専門家ではないので、詳細なことは分からないけれども、これらの品々は奈良時代前期以前や古墳時代の品々であるこの事実をどう考えてよいのか、前にも述べた強大な日向の国に残存していた銅鏡なのか、また、これらを百済の王族達が和から日向に運んできたのかは明確ではないが、これほどの数の銅鏡が一箇所に保存されていることは学問的興味をそそる事実である。ただ、唐花六花鏡(端花六花鏡)については、現在五面しか我が国に残されておらず、その一つは正倉院の御物として保存されている。「スイカズラ」の紋様が鏡の裏面に施されたこの鏡については次のようなことが一部の学者から指摘されている。正倉院の御物をもとにして鑄造されていると、その鑄造された鏡がなぜ南郷村に残されているのか。その理由としては、百済系の帰化人が壬申の乱でもって地方に逃亡を余儀なくされてから、約八十年後持統天皇の時代になって百済系の王族は再び権力の中枢に位置するようになるのである。日本書紀などを調べてみると、東大寺建隆の際に百済一族の王の慶福によって、東大寺に対して金九百両が寄贈されている事実がある。この事実から想像して、百済王の慶福はこの日向に一族の禎嘉王の家族が逃亡し、非業の最期を遂げた事実を祖先によって知らされておき、これは誰にでも理解できることであるが、遙か遠くの半島の百済から渡ってきて、命を保った王族の一員として、同情を禁じ得なかった。特に儒教の国の百済人は、同族の一員の悲しい逃亡、またそれを助けた村人たちへの感謝の気持ちでいっぱいだったのではないか。その鎮魂の意味で南郷村の神門に銅鏡を送ったのではないかと想

像できるのである。

この神門神社の宝物の中に馬鈴、馬鐸、銅製の像は何を我々に語りかけるのであろうか。銅製の像などは我が国に一つしか見られない品である。きっと百済の王族達が逃亡するときに、村に持ち込んだ品ではないかと想像可能な事実である。特に銅製の像などは百済人達のお守りの品ではなかったかと想像できる。

このようにして、古代からの伝説、それを立証するような祭事(師走祭)や神門神社の遺宝、百済の王族達の流浪を信じない訳にはゆかないのである。江戸時代中期に書かれた比木神社の縁起には次のように記されている。

「天寶 正宝の頃(七六〇年頃)、百済に大乱が起こって、王族が海を渡って来て、その王族の一部が日向に流れ着いた。」

江戸時代中期、一千七百年代にもこれらの伝説は民衆の中に信仰されていた訳である。伝説という物は祖父から孫、ひ孫、その孫、ひ孫が祖父になったらまた次の世代に受け継がれていくわけで、百済王族の悲話はこのようにして語り伝えられたわけである。九十キロもの道のをご神体を持って旅をする。このような祭事は国内に例を見いだすことは不可能なことである。しかも、その祭の行列が村々を通る時は村中の人々がごぞつて歓迎する。つまり、村々の人々にとってはこの行列が神の来訪であり、彼らに幸せ(五穀豊穡・家内安全)をもたらす神なのである。これらの芸能が予祝の芸能として発達したわけである。

日本人にとって、非業の死を遂げたり、正義である者が不幸に陥るといった話、具体的に言えば、義経の流浪伝説、曾我兄弟の悲話などは実に大衆に支持されやすい話なわけである。義経にしても、曾我兄弟にしても大衆はこれを神として祭り、曾我神社などは雨乞いの神として祭られている。また、折口先生が言っておられる書種流離譚(つまり、身分の高い人が都を追われて地方を流浪する話)、光源氏や小野小町の伝説は民衆によって支持され語り伝えられたわけである。

次に、まだ研究を始めたばかりなのであるが、南郷村に於いて、本学の奥野教授と旅した時に、ハチ洞なる物を発見することができた。ハチ洞については日高正晴氏が「日向日向」なる著書の中で、朝鮮半島、対馬、それに奥日向に現存すると言っておられる。ハチ洞とは、ハチウドとも言い、大木をくりぬいてそれを山の斜面に

設置し、ハチを誘導してその中に巣を作らせ蜜を取る装置のことである。(別紙資料参照)

なぜ、朝鮮半島の養蜂の装置がこの奥日向に多く残っているのだろうか。この夏、南郷村の調査旅行の帰りに、白樺派の文学運動者の武者小路実篤が実践活動をした木城村石河内の「新しき村」を訪ねたが、その「新しき村」の中にも、このハチ洞があり、感情の高まりを禁じ得なかったのである。植嘉王の息子の福智王が父を助けるために援軍を募った地、そこがこの石河内である。

南郷村のパンフレットに「百済の王族達は村に学問、医学、農業技術を伝えた。」とある。このハチ洞は朝鮮半島の進んだ農業技術を村人達に、今のJAの指導員のようにして、教え伝えた技術だったのではないかと想像できるわけである。

### 結びに

昭和六十年代になって、政治家やマスコミによって、国際交流の時代とか異文化理解の必要性とかが声高に叫ばれるようになった。この古代日向の南郷の地に於ける、村人達と百済王族達との交流はまさに国際交流の原点であり、始まりであった。また、この史実をもとにして、田原村長以下、村役場が一丸となって、韓国の扶餘市との交流を深め、村中が百済の里づくり運動を実施している。ふつうの市町村には英語の国際交流員が駐在しているのに、この村では扶餘出身の若い金嬢が駐在して、村の中学生や青年達に韓国語などを教えている。実に微笑ましいかぎりである。そして、百済の里づくり運動を村起こし運動としている。

この論文をまとめるにあたり、数回にわたり南郷村を訪ねたわけであるが、実に温かくもてなして頂き資料を提供して頂き感謝の気持ちであります。村長を初め村の方々に心からの御礼を述べさせて頂きます。尚、この論文は今年の七月に宮崎市民大学での講演をまとめたものである。調査に同行して頂いた本学の荒木、奥野、江上、中別府、チェ先生には心から御礼を申し上げます。

### 引用文献

- (1) 日本書紀 上下 岩波日本古典文 学大系 岩波書店
- (2) 鑑賞万葉集 大矢武師他著 学術図書館出版
- (3) 古代日向の国 日高正晴著 日本放送出版協会
- (4) 神門物語 南郷村役場編

写真資料1

韓国慶尚北道鳳化郡法田面ソチョン里（崔仁宅氏提供）



写真資料2

南郷村神門部落





師走巡り巡幸路程図



